本と幸せ 11

北村 薫 作家

葉っぱの命

去年の夏のことです。NHKで『ニッポンぶらり鉄道旅』という番組をやっていました。「奇跡の出会い」という副題がついていました。

JR中央線立川に、ツタのからまる建物があり、その二階のアトリエでおよそ四十年にもわたり、千点に近い作品を描き続ける人が紹介されました。

自らを葉画家という、群馬直美さんです。

絵の対象となるのは、——葉っぱです。葉脈の一本一本まで、細かく再現していく、気の遠くなるような作業が続きます。パールホワイトの絵の具で、日差しの照り返しまで描き込まれる。

群馬さんはいいます。



『葉っぱ描命』
絵と文…群馬直美／燦葉出版社
定価2,750円

——生きとし生けるものの生命力が、ここにある。このキラキラ感は、わたしにとって大事なものです。

どうして、葉っぱばかり描くようになったのかと、聞かれると、

——美大の学生だった頃、世界で一番美しいものを作ろうと思い、三カ月かけて完成させたオブジェがありました。それを見た小学生が、こわい——といって泣いたのです。美しいものとは何か。そこで、創作の手が止まってしまいました。何も描けなくなった。そういう時、公園の緑を見ました。太陽の光が葉を透かして見え、はっとしました。この感覚を人に伝えたいと思いました。

それこそが、奇跡の出会いだったのです。

群馬さんの絵と文からなる『葉っぱ描命』には、最近の作品「神様の仕業—下仁田ネギの一生—」が収められています。この作品は、英国王立園芸協会主催の「RHSロンドン ボタニカルアートショー2019」で、最高賞を受賞したそうです。——なるほど、そうだろう、と頷ける、素晴らしい作品です。

群馬さんは、この本の中で、お父様が逝ったことを語られています。《父にいただいた命で 私は葉っぱの絵を描いている》と。

「下仁田ネギの一生」は、二月の、小さな小さな苗の赤ちゃんから始まります。四月、仮植えされる、優しい色の、少年のようなネギ。

ページをめくりつつ、わたしたちはまさに命そのものを見ていると思うのです。

植え替えられ、次第に成長していく姿。収穫期のネギには、立派になったね——と声をかけたくなります。

枯れ葉ネギに向かって、群馬さんはいいます。

——歳をとり皺だらけになっても、みんな中身は純白で瑞々しいのだ、きっと。

と。

中の「4月21日 花」の絵には《緑色の部分は繊細で少し触れただけで痕がつく。この花の軸についた痕跡は、大澤さんと私の手の痕》という言葉がついています。

《大澤さん》は農家の方。群馬さんは『ニッポンぶらり鉄道旅』の中で、

《農家さんと、描いている私と、ネギ自体の、三つの命があわさって、一枚の絵ができあがった》と語っています。指の触れた《痕》までもが、描きとられているのです。

群馬さんの作品は原寸大が多いのですが、この本の前から中の方には、大きく拡大された植物の姿も描かれています。

わたしは、小学校にもあがらない小さい頃、家の近くで、ネコヤナギを見つけました。手ざわりが不思議で母に告げた時、まさにそれしかないという、名前を教えられました。今、群馬さんの絵を見て、遠い昔が、あざやかによみがえりました。

多くのことを思わせてくれる一冊です。